

庵乃音人  
挿絵／貂

とろ蜜美女めぐりの  
桃色バスツアー

試し読み版



Contents

## 目次

第一章	美人バスガイドの誘惑	4
第二章	眼鏡OLと青姦プレイ	67
第三章	若妻に、不埒な夜這い	124
第四章	未亡人と汚いトイレで……	173
第五章	愛しの女子大生と歓喜の夜	220
エピソード たひだち 出発	……	280

## 登場人物

Characters

### 古橋 啓太 (ふるはし けいた)

名門私立大学に通う十八歳。仏像サークルに所属しており、一年先輩の真帆に思いを寄せている。勇気を出して秘仏鑑賞バスツアーに真帆を誘う。

### 弓野 真帆 (ゆみの まほ)

啓太と同じ大学、同じサークルに通う十九歳の女子大生。地方都市にある有名古寺の一人娘。長い黒髪を靡かせる清楚な雰囲気ながら、Gカップの巨乳が目を引く美少女。

### 目黒 佳織 (めぐろ かおり)

舌っ足らずな喋り方が愛嬌のある二十二、三歳のバスガイド。どこかあどけなさを残した顔立ちとは裏腹に、好色で積極的な情熱家。

### 山浦 亜紀 (やまうら あき)

生真面目で堅物な雰囲気のあるOL。啓太たちと同じツアーに参加する二十九歳。黒縁眼鏡でキツイ印象を与えるものの優しい一面もある。スラリとしつつもFカップのモデル体形。

### 杉本 美砂 (すぎもと みさ)

ほんわかした癒やし系の若妻。啓太たちと同じツアーに参加する二十五歳。亜紀の職場の元後輩。むちむちした色白ボディ丸い小顔も愛くるしい美人。

### 日向 響子 (ひなた きょうこ)

母性愛が溢れつつもどこか儂げな陰のある未亡人。啓太たちと同じツアーに参加する三十四歳。Hカップの爆乳にむちむちと完熟の女体を持つ。

## 第一章 美人バスガイドの誘惑

### 1

「みなさま、お待たせしました。三泊四日の『隠れ里秘仏御開帳ツアー』、いよいよ最初のお寺が近づいてまいりました！」

熱気を漂わせる賑やかな車中に、マイクを握ったバスガイドの声が響く。二十人近くいるバスツアーの参加者たちは歓喜の声を上げ、拍手で応えた。

いささか舌つ足らずながら、めっぽうキュートなバスガイドは年齢二十二、三歳。

可愛い笑顔を見せるたび、歯並びのいい真っ白な歯列が口元に覗いた。

淡い桜色のブレザーにベスト、白いブラウスに黒い膝丈スカートという制服姿がよく似合っている。

髪をアップにまとめた頭に桜色の丸い帽子をちょこんと乗せ、黒のパンプスを履いていた。胸元を彩る軽やかリボンのふわふわ感も艶めかしい。

マイクを握った細い指には白い手袋が嵌められて、愛らしいやらかつこいいやら、

何とも男心をくすぐられる。

開放的な窓越しに差し込むのは、ぼかぼかと暖かな十一月の陽光だ。

海辺の道を行き続けてきたバスは、いつしかのどかな里山に入り、いくつものカーブを右へ左へと蛇行しながら坂を上っていた。

「と、とうとう来ましたね、真帆先輩」

胸の奥で心臓が、とくとくと激しく乱れ打っていた。古橋啓太は懸命に何でもないうりをしながら、窓側に座った可憐な女子大生に声をかける。

これから見られる仏像の数々に期待して、という理由も、もちろんなくはない。

しかし、さつきから心臓がこんなにもせわしなく仕事をしているのは、憧れのマドンナであるこの人と、当たり前前のように肩を並べているからだ。

「うん。ワクワクするね」

そんな啓太の胸躍る興奮に、愛しいその人は気づいていない。

坂の先に見え始めた古刹の眺めに目を奪われ、清楚な美貌に感動の微笑を浮かべて、鈴の鳴るような声で答えた。

弓野真帆。

啓太が通う名門私立大学の一年先輩で、某地方都市にある有名古寺の一人娘である。

知りあつたのは、大学の仏像サークルだった。

ひとめで、恋に落ちた。

来年、成人式を迎えるれっきとした大人の女性ではあるものの、ひと言で言うならその容姿は、みずみずしさ溢れるため息がでるほどの美少女。

学内ではちよつとしたアイドル的存在で、男子学生からのデートの誘いは、ひきもきらなかつた。

ウブで奥手で小心者で、恥ずかしながらいまだに童貞の啓太には、はっきり言つてハードルが高すぎる相手。高嶺の花以外の、何ものでもない。

(それなのに)

なおも窓外を見つめる美しい娘に鼻の下を伸ばし、啓太はぐびつと生唾を飲む。

(こんな風に、真帆先輩と二人きりで見仏旅行に。しかも、今日から四日間も、ずっと一緒にいられるなんて)

そう思うと、溢れる喜びで胸の中がいっぱいになり、自分で自分を抱きしめて身悶えすらしたくなる。

平凡さを絵に描いたような小市民の啓太には、一生におそらく二度とはないはずの、できすぎもいいところのビッグチャンス。

今回の、この僥倖の場を利用して、彼は真帆に、こう言おうと決めていた。

——真帆先輩。好きです。俺と……つきあってください！

《××寺のヤブユムが、十一月の連休に六十年ぶりに御開帳になるそうなんです。い、一緒に、見に行ってみませんか?》

勇気を出して真帆を誘ったのは、今からひとつきほど前。二人しかいない、仏像サークルの部室でのことだった。

《え。××寺のヤブユムって……あのヤブユム!!》

透き通るように雪白の頬を、曇りガラス越しの西日が茜色に染めていた。

どことなし、愁いを滲ませる儂げな面差し。それが見る見る一変し、大きな瞳をさらに大きく見開いて、真帆は啓太を見つめ返した。

お寺の娘である彼女は、仏像に詳しかった。

へたなおたく顔負けの博識さで、全国の秘仏、名仏、マニアック仏に通じていたし、サークルに所属する女友達とも、よく連れ立って見仏旅行に出かけていた。

中学の頃から仏像が大好きで、大学に入るや迷わず仏像サークルに飛び込んだ啓太ですら、思わず唸らずにはいられない広く深い知識の持ち主。

××寺のヤブユムも、知ったのは真帆がきっかけであつた。

サークルの先輩と真帆が部室で話題にしていたのをさりげなく盗み聞きして、初めてその存在を知つたのである。

ヤブユム——俗に言う、歡喜仏。

男女が合体して愛を交わす様を形にした、数奇な仏像。

我が国では、頭が象で身体が人という形の双身像がもっぱらだが、ごくまれに、頭も身体も人という、まさに人間同士が交合する姿に造られた像もある。

今回御開帳となつた貴重なヤブユムは、そうした珍しい人身像の秘宝として、マニアの間ではつとに有名なものだった。

啓太から誘いを受けた真帆は、ほとんど二つ返事といつてもいい即答ぶりで同行を承諾し、こうして二人はどちらの親にも内緒にして、大学のある街から電車を乗り継いで三時間以上もかかる、風光明媚な海沿いの、この里山へとやってきたのである。

真帆がそこまで知っているのかどうか定かではなかったが、実はこの秘仏には、一緒に見た男女を恋人として成就させる、神秘的な靈験があるという噂だった。

啓太はそのことにも密かに大きな期待を抱き、ヤブユム拝観の時を今からワクワクと心待ちにしながら、真帆との旅をスタートさせたのであつた。



めざす歓喜仏にお目にかかれるのは、明後日の午後。

それまでツアーは、さまざまな寺社を回り、時期を合わせて特別開帳される珍しい仏像の数々を、たっぷりと見て回ることになっていた。

（ああ、楽しみだな……）

隣に座る眩しいヴィーナスの横顔をちらちらと盗み見ながら、啓太は改めて胸を弾ませる。

きつと楽しく素晴らしい、人生最高の四日間になるはず。いや、何があっても、そうさせねばならなかった。

啓太たちを乗せた観光バスは、最初に予定されていた寺の駐車場へと入った。車内ではまたも、客たちによる興奮気味の拍手と歓声が轟いた。

## 2

「わあ、すごい。啓太くん、馬頭観音よ！」

大きな瞳を輝かせた真帆が、目当ての仏像に急ぎ足で近づいていく。

いつもおつとりとした、どこかお嬢様っぽい女子大生だったが、彼女もまたいさかななりとも昂揚してくれているのか、いつになく無邪気な素顔を見せていた。

(なんだか、嬉しい……)

幸せまみれの笑みを噛み殺し、真帆の後に続く。

靴を脱いだ啓太たちがいそいそと上がってきたのは本堂だった。

枯れた味わいの柱や壁、茅葺き屋根も旅情をそそる、室町時代に建てられたという入母屋造の古いお堂だ。

濃い緑に包まれた、のどかな里山の中腹に、寺はあった。

眺望抜群の広々とした境内からは、湾岸伝いに続く昭和レトロな町並みや、秋の日差しを浴びて白く光る大海原が見えた。

ツアー客たちはお堂に入り、住職による寺の縁起や仏像の説明を聞き終えたところであった。

《あととはご自由に、内陣まで入って仏さまを拝んでください。内陣の裏側にも仏さまがいっぱいいますので、そちらもどうぞゆつくりと》

啓太たちは、そんな住職の言葉を合図に、思い思いに興奮気味の嘆声を零して、内陣へと足を踏み入れたのである。

対面を果たしたのはこの寺の御本尊で、実に十二年ぶりの特別開帳になるという、馬頭観音坐像。

慈悲に富んだ、穏やかな顔立ちをしていることの多い観音菩薩群の中では、例外的な憤怒相で見る者を威圧する個性豊かな仏像で、特にこの寺の本尊は、その造形がとても写実的であることで知られていた。

「へえ、意外に小さいのね……」

心待ちにしていた仏像を拝観できた真帆は、須弥壇しゅみだんに身を乗りだすようにして、厨子ずしに安置された馬頭観音像を見る。

他の客たちは「すごいわね」「ちょっとお顔が怖くない?」「でも男前よ、とつても」などと思いきいの感想を交わしながら、三々五々、内陣の裏へと回りだしたのに、そんなことなどお構いなしという様子だ。

「そうですね。写真だと、もつと大きい像に思えましたよね」

像高八センチほどの像の前に、啓太も負けじと首を伸ばして、真帆と一緒に鑑賞する。そんな彼の鼻腔に、ふわりと甘い、果実のようなアロマが飛び込んだ。

(ああ、真帆先輩の香り……いい匂い)

思わず目を細めて、恍惚とした気分になる。

バスの座席に並んでかけている時も、これまで経験したことのない距離感だったが、よく考えたら今の方が、さらに顔が近づいていた。

（お、落ち着け。落ち着け！）

「やっぱり、この迫力のせいで大きく見えたのね。わあ、凛々しいお顔……」

しかし真帆は、そんな後輩の動揺ぶりになど、これっぽっちも気づいていない。

ほんのりと頬を上気させ、「素敵ねー」と囁き声で言いながら、なおも身を乗りだし、首を伸ばす。

（き、綺麗だな、先輩……）

早くも啓太の関心は、仏像から真帆へと移ってしまう。

いや、それはたしかに仏像も嬉しいが、こんな無防備な真帆がすぐ隣にいたのでは、とてもまっさらな気持ちで仏像鑑賞などしてられないかった。

くりっとした瞳も印象的な、凛々しさと可憐さの双方をたたえた清楚な美貌。烏の濡れ羽色をした長い髪が、背中中で毛先を踊らせている。

いつだって見つめていたくてしかたのなかった憧れの小顔を、横からそっと眺められることに、啓太はじーんと幸せを覚えた。ところが、

（——うおお！ やばい、先輩の、お、おお、おっばい！）

何の気なしに視線をずらした啓太は、思わず声を上げそうになる。

本日の真帆の装いは、白いレースのプルオーバーにデニムのホットパンツ。

プルオーバーはゆったりした感じのデザインではあるものの、それでも真帆が胸元に隠し持つ、破壊力抜群の乳房の量感はごまかせない。

生唾を飲みそうになりながら、プルオーバーの胸元を突き上げる、たわわな膨らみをガン見した。

そう。彼の見立てでは、控えめに見てもGカップ、九十センチはあるはずの、まごう方なき艶麗巨乳。

楚々とした美貌でありながら、おっぱいはこんなにも豊満だなんて、神様とはなんと罪作りなお方であろう。

「あれ。うふふ、見て、啓太くん。観音様の頭に乗ってる馬、可愛いわよ」

（ゆ、揺れてる。うう、こんなにも、たつぷたつぷといやらしく……）

啓太は本当に、もう仏像どころではなかった。眼窩から目玉が零れ落ちるのではないかと思うほど目を見開いて、揺れるおっぱいを凝視してしまふ。

薄いレースの生地越しに、うつすらとブラジャーが透け見えていた。

しつかりと下着でガードしているはずなのに、なんだこの、これ見よがしの揺れ方

は。重たげに、しかも仲よく二つ揃って、上へ下へと艶めかしく揺れる。

(すごい。ああ……触ってみたい！)

「ねえ、聞いてるの、啓太くん」

「ええ、聞いてます。可愛い馬ですね」

すかさず答えはしたものの、馬など見てすらいなかった。こんなに平気で空々しい嘘をつけるだなんて、いったい俺は、どうしてしまったというのか。

(それに……うおお！ このお尻！)

おっぱいに見とれてボルテージの上があったいけない劣情は、またまた視線を下降させ、いつそう強烈なものになる。

繰り返しになるけれど、本日の先輩はデニムのホットパンツ姿。

そうであるにもかかわらず、目の前の仏像に夢中になるあまり、前のめりになってヒップを突きだしてしまっている。

(どうしたんだ、俺。ああ、自制心が……)

視線を剥がさねばと思いはするものの、今度はどうしても、真帆のお尻から目を逸らせない。

デニムの青い生地をパツンパツンに突っ張らせ、柔らかそうな臀肉が丸い盛り上が

りを強調している。

見事に発達した十九歳の肢体は、どこもかしこもむっちり肉感的であった。

中でもおっぱいと競いあうかのように量感と迫力を主張するのが、見ているだけで息詰まるような気分になる、逞しすぎるヒップである。

大きな桃を見ているかのようだった。まろやかかつ艶麗極まりない曲線を描いて、二つの膨らみのはち切れんばかりになっている。

尻の中央に窪みがあるのは当然のことながら、ホットパンツが艶めかしく凹む淫靡な眺めを目にすれば、そんなことすら啓太の胸はドキドキとせわしなさを増す。

「怖い顔をされてるのに、頭に乗ってるお馬さんはこんなにも可愛いだなんて。ふふ、こういう落差に、キョンと来ちゃうのよね。それにしてもリアルな造形……」

(うう、太腿も、いいんだよなあ……)

真帆の言葉など上の空で、滅多に見ることの叶わないピチピチ肢体を鑑賞した。

ホットパンツの小さな輪から、二本の太腿が窮屈そうに飛びだし、肉を震わせている。

みずみずしい脂肪を内包した健康極まりない色白腿は、いつそひざまずいて頬ずりをしたいほど。

驚掴みにしてギュギュッと絞れば、大福餅顔負けの柔和さでひしゃげてくれそうな弾力とぬくみを期待させる。

啓太の股間をキュンとさせるのは太腿だけでなく、子を孕んだししゃもを彷彿させる脹ら脛も同様だった。

足を動かして身体を揺らすたび、脹ら脛の筋肉が濃い影を作って盛り上がる。

（真帆先輩。エロすぎる。おかしくなりそう）

「わあ、こっちの角度から見ると、お顔の雰囲気が違う！ 見て、啓……きゃ!!」

すると、その時であった。新たな発見に興奮し、違う角度から仏像を見ようとした真帆は、意気込みすぎて足元をもつれさせる。

「きゃああああ」

「先輩!? 危ない!」

我に返った啓太は泡を食い、両手を広げて真帆に飛びかかった。

ムギユウ……。

「ああん……」

（うおおおお！ だ、抱きしめちゃった！ え——!）

間一髪のところで真帆の転倒を阻止することができた。バランスを崩した美しい娘



は、年下の青年に抱きとめられ、体重のすべてを彼に預ける。

啓太は気づいた——大きなおっぱいが、思いきり俺に密着している！

(あああ！ な、なな、なんていう柔らかさ。それに……温かい！)

現実には起きた出来事だとは、にわかには信じられない気もした。しかし薄手のプルオーバーの向こうには、たしかに乳房のリアルな感触がある。

それはまさに、マシユマロ顔負けの柔らかさであった。二人の身体に挟まれた格好で、双子の乳がプニプニと弾む。

胸板に食い込むいささか硬めの肌触りは、もしかして乳首によるものだろうか。

ああ、俺は今、先輩の乳首を感じているのか！

「ご、ごめんね……！」

弾かれたように、体勢を立て直して真帆が離れた。見れば愛しい娘の美貌は、心持ち朱色に火照っている。

「ケガ、なかったですか？」

「うん。平気。私ったら、何してるんだらう。行こう」

心配して問いかけると、顔を見られるのをいやがるようなそぶりとともに、慌てて真帆は仏像の前を離れた。

(まだ残ってる。おっぱいの感触。ドキドキする)

痩せっぽちの胸板に、なおも乳房のぬくみを感じた。

不覚にも、腿のつけ根がつーんと疼く。

(いかんいかん。さあ、行くぞ)

浮き足立ちそうな桃色気分を、必死になって抑えつけた。馬頭観音に手を合わせて念入りに拝むと、啓太は急いで真帆を追った。

### 3

仏像巡りの旅にかかせない楽しみに、物販コーナーを冷やかすことがある。

お寺によっては気が抜けるほど力を入れておらず、がっかりさせられるところもあったが、馬頭観音で人気の寺の土産処はかなりの充実度だ。

境内の一隅に、納経所兼務の売り場があった。ツアー客たちはみな興奮気味の声を上げ、目当ての土産を物色している。

「わあ、すごいっぱいある。マステ、ないかなあ」

キラキラと目を輝かせた真帆は、ごった返す人波に揉まれながら、このお寺が販売

しているかも知れないレアなマステ―マスクングテープを探し始めた。

タオルにストラップ、便箋や封筒のセットにポストカード、パンフレット。

店内には、神社仏閣好きの購買意欲をそそられずにはいられないさまざまな土産物が並べられ、そこかしこに人だかりがしている。

「いや、どうでしょう。さすがにマステまでは……あれれ……」

意見を返して会話をしようとしたものの、すでに真帆の興味は土産物の方に行っていた。

するり、するりと人波をすり抜け、啓太の前を離れてしまう。

（先輩、ほんとにこういうところが好きなんだな。さすがはお寺のお嬢様だ）

そんな真帆のワクワクぶりが、可愛いやら、おかしいやら、嬉しいやら。

若いくせしてこういう場所が同じように大好きな啓太は、自分も土産品を見て回ろうと、真帆とは違うエリアから攻めることにした。

「あら」

「あ……」

すると、一人の女性と偶然すれ違って目と目が合う。

「ふふ、どうも」

「あ、ど、どど、どうも」

それは、いつの頃からか存在に気づき、意識するようになっていた女盛りの美女。啓太はちらつと、ネームプレートを見る。

ひなた  
(日向……響子さん)

名札には、そんな素敵な名前が書かれていた。

響子とは、なんと似合いの名前であろう。ゴージャスでありながら儂げな艶をそこはかとなく忍ばせた、この人のイメージとぴったり合っている。

年の頃は、三十四、五であろうか。

透き通るように白い細面に、愁いを忍ばせた垂れ目がちの瞳と、色っぽい柳眉が印象的だった。

淡いピンクのワンピースに熟れた肢体を包み込み、もっちり肉感的な美脚には、シックな色調の黒いパンプスを履いている。そして、

(うう、響子さんも、おっぱいすごい……)

爛れた色香を鱗粉のように振りまくこの女性もまた、男心を惑わせる見事なまでの巨乳の持ち主だった。

高価そうなワンピースの胸元を盛り上げているのは、Hカップはあるのではないか

と思われる、たわわに実った九十五センチ程度の豊熟おっぱいだ。

ちよっと動いたびにたつぷたつぷとこれ見よがしに揺れ、柔らかそうな肉質を、見るだけで男に強烈にアピールしてくる。

どうやら一人旅のようだった。二人がけの座席に一人で座り、寂しげに目を細めて窓外の景色を見る艶めかしい横顔に、啓太は何度も目を奪われた。

「何かいいもの、ありそうかしら？」

ぎこちなく挨拶を返して恐縮する啓太に、優雅に笑って響子は言う。一回り以上も年上なはずの大人の女性に優しくされ、啓太はさらに緊張した。

「は、はあ。あると、いいですね」

「うふふ。そうね」

なんと間抜けな答えを返してしまったものか。しかし響子はたおやかに微笑み、品よく目礼をして啓太の前を去った。

一度として嗅いだこともないような、甘く深みのある香水の匂いに、ついつい啓太はうっとりとなる。

「は。世の中には、ああいう素敵な人ってほんとにいるんだな……うん？」

熟女の残り香におも脳の芯を痺れさせつつ、ため息混じりに呟いて商品棚を見た、

その時であつた。

（——あ!? あれは……マステ!?)

偶然目にしたその棚に思いがけない商品を見つけ、啓太は思わず息を飲む。

なんとなんと、お洒落な籐籠に入れられて、真帆の目当てのオリジナルマステが販売されているではないか。

「あつた……あつた! マステ、売つてたんだ!」

小躍りをした啓太は、真帆を驚かせ、喜ばせてやりたくなつた。マステの入れた籠に足早に近づき、商品に腕を伸ばそうとする。ところが、

「痛い!」

「あ。す、すみません!」

勢いあまつて誰かの脚を、ムギユツと踏んでしまったらしい。不機嫌そうな声を上げられ、啓太は慌てて脚を上げ、その人に詫びる。

「もう、痛いじゃないの。気をつけなさいよ」

その女性はこれ見よがしに顔をしかめ、怒りを抑えて文句を言った。

胸元のネームプレートに書かれていたのは、

（山浦……<sup>やまうら</sup>亜紀、さん）

「ごめんなさい。大丈夫ですか」

ムツとした表情で靴の汚れを払う亜紀に、もう一度啓太はおろおろと詫びた。明るい栗色の艶髪と、黒縁眼鏡が印象的な人だった。

OLだろうか、それとも人妻か。啓太より明らかに年上で、黒縁眼鏡のレンズ越しに、勝ち気そうな瞳がくりくりと動いている。

ご機嫌斜めな様子なのにはいささか引いたが、まじまじと改めてその顔を見つめれば、意外や意外、色白小顔は端整で、美人といってもいい華やかさだ。

(それに、スタイルもいい)

睨むような視線に気圧され、思わず泳いだ啓太の視線は亜紀の肢体に注がれる。眩しいほど白いブラウスに、デニムのブルージーンズというラフな出で立ちだ。

すらりと華奢そうなモデル体型であるにもかかわらず、胸元の盛り上がり具合は色っぽさ満点。Fカップ、九十センチ近くはあるように見える。

「大丈夫なわけではないでしょ。どこを見て歩いているの」

色白女性のはずなのに、怒りのせいにか整った美貌が見る見る朱色に染まっていく。たしかもう一人の若い女性と、二人連れでツアーに参加していたのではなかったか。そう言えばバスの中でもどこかどよんと重苦しい雰囲気で、せつかくの見仏旅行な

のに、何なんだこの人はと、ふと気になったことを思いだす。

「すみません。あの、どうお詫びをしたらいいか」

「お詫びも何も——」

「どうしたんですか、亜紀先輩」

こうなつたらとにかく謝るしかないと、会話を続けようとした時であつた。突然啓太の背後から、鈴の鳴るような女の人の声がする。

(……もしかして)

亜紀の連れであるもう一人の女性ではないかと期待した。啓太の記憶に間違いがなければ、バスの中で亜紀の隣にいた人は、ほんわかとした優しそうな美女である。

助けを求めるように振り向いた啓太と、その女性の視線が交錯した。やはりあの人大ど、啓太は軽く会釈をしながら、女性の名前を確かめる。

杉本美砂——美砂さんか。なんと素敵な名前だろう。啓太がそう思ったのは、そこにいたのが予想通りの、丸い小顔も愛くるしい癒し系美人であつたからだ。

きよとんと見開かれた大きな瞳は、裏表のなさそうなこの人の魅力をダイレクトに伝えていく気がした。

濡れたように黒いショートヘアが、色白美貌をキュートに彩っている。



「み、美砂。ちょっと、この子に足を踏まれちゃってね」

声をかけられた亜紀は、居心地悪そうにあらぬ方を向いた。

「まあ、平気ですか？」

「うん。まあ……」

美砂は柳眉を八の字にして亜紀に駆け寄る。

そんな後輩の心配そうな様子に、居心地悪そうに唇を噛み、もう一度啓太をギロリとひと睨み。

以後は重々気をつけるようにと無言の内に青年を威嚇し、買い物客の混雑に、逃げるように亜紀は消えた。

「ごめんなさい……古橋、さん？」

啓太の胸のネームプレートを確かめ、申し訳なさそうに美砂は言う。

「いえ、そんな。悪いのは俺なんです。あ、それと啓太でいいです。啓太くんとか」

八の字眉で見つめられ、啓太ははにかんでかゆくもない頭をかいた。

こうして面と向かつてみれば、やはり可憐で柔らかな顔立ち。あどけなさを残した初々しい表情は自分と同じ年ぐらいに思える。

そのくせ首から下にあるものは、そんな愛らしさ満点の美貌とは相容れない、見事

なまでのむちむち感。

白地に百合がデザインされた、楚々としたワンピースに身を包んでいた。

ノースリーブの袖から伸びた白い腕は、どこもかしこももっちりとしていて、ジュシー極まりないみずみずしい質感だ。

胸の膨らみこそ、八十センチそこそこのDカップという程度であったが、その分スカートを盛り上がらせるヒップの量感は尋常ではない。

ワンピースの裾がヒラヒラと、膝上あたりで揺れていた。見え隠れを続ける太腿も、眩しいほどの色艶と健康さで、啓太の網膜を焼き焦がすかと思うほどだ。

「啓太くんか。あ、私は杉本美砂。美砂さんでかまわないわ。それにしても、ごめんですね。亜紀先輩、ちよつとプライベートでいろいろあつて」

あたりを憚るような小声になり、美砂はそつと打ち明けた。淫靡な視線で身体を見られていたことになど、これっぽっちも気づいていない。

「あ……そ、そうだったんですか。いや、別に気にしないでください。あの……学校の先輩さんですか、亜紀さんは」

親しげに話しかけてくる美砂に包まれるような快さを覚えつつ、そんな彼女を品定めするような真似をしてしまったことに、啓太は後ろめたさを感じた。

「ううん。会社の先輩。もつとも、私はもう結婚退職しちゃってるんだけど」

「え。人妻さんなんですか、美砂さん!？」

意外すぎる告白に、啓太は思わず仰天した。

そうすると、世の中にはこんな可愛くてむちむちした身体の女の子の人を、日ごと夜ごと、自分の好きなように抱くことのできる幸せな男がいるというのか。

「だって、もう二十五歳だもの……あ、今のは亜紀先輩には内緒ね。ふふ」

失敗失敗というようにお茶目に顔をしかめ、口の前に人差し指を立てて美砂は言う。「亜紀先輩、少し前まではほんとに幸せそうだったの。二十代の内に結婚できるっつすごく喜んでいたのに、年下の恋人に裏切られちゃって」

「そう、ですか……」

となると亜紀は、二十九歳ということだろうか。

あの怖そうな眼鏡美人が幸せそうに男に甘えている姿は、残念ながら今の啓太には想像できない。

「だから年下の男の子っていうだけで、ちょっと意地悪になっている部分もあるのかも。悪い人じゃないの。ほんとよ?」

「わ、分かってます」

至近距離で首を伸ばして見つめられ、浮き足立った啓太はどもりながら答える。思わず顔が熱くなり、不様に視線が虚空を泳いだ。

「ところで、啓太くんは学生さん？」

すると美砂は話題を変え、ニコニコと笑んで啓太を見る。

「え？ あ、はい」

鼻の下が伸びそうなほど可憐な笑顔で問いかけられ、ゾクツと背筋を震わせながら啓太は答えた。

湯上がりさながらのしっとり感なのに、ショートカットの黒い髪はサラサラと躍って甘い香りを撒き散らす。

「一緒にいるのは……カノジョさん？ あの綺麗な女の子」

「え、ち、違います！」

どうやら美砂も美砂で、啓太と真帆の二人組に目を留めていたらしかった。

悪戯っぽく見つめられ、啓太は慌てて否定する。

「あら、違うの？ てつきりそうかと思ったのに。そうか、そうか。ふふ、がんばってね、啓太くん」

「が、がんばるって、な、なな、なにをですか」

「うふふ。じゃあまた」

意味深な言葉と笑顔を残し、癒し系のほんわか若妻は、スカートを翻して啓太の前を離れた。色香溢れる柑橘系の残り香に、啓太は鼻腔と脳の真芯を痺れさせる。

「もしかして俺……真帆先輩への下心、まわりにバレバレになってる!!」

人波の中に姿を消した美砂の言葉を思いだし、啓太はさらにうろたえた。

物色を続けるツアー客たちは、なおも思い思いにはしゃいだ声を上げ、それぞれの買い物に夢中になった。

#### 4

「ふう、やれやれ……」

見仏ツアー一日目も、ようやく終盤に差ししかかっていた。

啓太たち一行は事前に組まれた行程表の通り、二つのお寺を回って貴重な仏像の数々を拝観。

胸躍る感動と興奮、心地よい疲れを覚えつつ、休憩とこの日最後の買い物兼ねて、海沿いにある広々とした道の駅へとやって来ていた。

啓太一人だけが乗ったバスは駐車場に止められ、あたりには人影もない。

行動を共にしてきた団体様ご一行も、道の駅の喫茶店や物販コーナーに散らばって、一時間ほど与えられた貴重な時間を、思い思いに過ごしていた。

「真帆先輩も、楽しそうでよかった」

一人ぼつんとシートにもたれ、眺めるともなく外の景色を眺めながら啓太は呟く。西の空へと傾いた日差しが、見渡す限りの大海原に光の破片を撒き散らしていた。

女の人という生き物は、やはり男などとは桁違いに、買い物好きらしい。

ご多分に漏れず真帆もまた、今もまだ広大な物販コーナーを目を輝かせて回りながら、これはと思った土産物を買って物籠に入れていくはずだった。

「……しかしよく考えたらこのツアー、なにげに女の人ばかりなんだよな」

時間が経つほどに、客たち一人一人の存在感が少しずつ鮮明になってきていた。

仏像を見ながらおいしいものを食べ、たっぷりと買い物を楽しむなどという優雅な旅は、男性より女性の方が魅力を感じるものなのかも知れない。

仏像はともかく買い物タイムとなると、こんな風に時間を持てあましてしまう青年は苦笑混じりに思った。

やることもないので、バスマターの客たちのことを記憶の箱から取りだしてみる。

女の人ばかりの旅というだけでなく、客たちはみな、意外に美人揃いである。

「美砂さんでしょ、それから……あの亜紀さんって人も、むかつくけどけっこう美人だよな。それに……響子さん。やつぱりあの人も人妻さんなんだろうな。まったく響子さんといい美砂さんといい、あんな綺麗な人たちと結婚できる男が羨ましいよ」

こちらはこの先、真帆先輩とどうなるかまったく予想がつかないのにと、啓太はついため息を零す。

「それに、あのガイドさんも、やつぱり可愛い」

続いて脳内いっぱい広がったのは、いつしか客たちともわいわいと仲よくなり始めていた、例のキュートなバスガイドだ。

彼女の名前は、目黒佳織<sup>めぐろかおり</sup>。舌つ足らずの喋り方も最初の頃こそ気になったものの、慣れてしまえばそれ自体もまた、佳織というガイドの大きな魅力になっていた。

仕事柄、当然と言えば当然だろうが、状況に応じたしなやかなトーク力は感心するほどで、バスの中では何回も、彼女の繰り出すギャグの数々に笑いの爆弾が炸裂した。幼さを残した愛くるしい顔立ちからは意外だったが、性格は人なつっこく積極果敢で、どの客にも進んで声をかけ、話題を作ったり共有しようとしたりする。

そんな佳織の魅力に客たちもたちまち好意を持ち、いつからか「佳織ちゃん」「佳

織ちゃん」と親しげに呼ばれるほどになっていた。

もつとも奥手な啓太だけは、いまだに苗字すら呼べずにいたが……。

「あれ、こんなところにいたんだあ」

すると、バスの乗車口から誰かが啓太に声をかける。

耳に覚えのある、舌つたらずな喋り方だ。

「あ……」

驚いてそちらに目をやれば、他ならぬそのバスガイドが、ニコニコと相好を崩して入ってきた。

「まだ随分時間ありますよ？　しばらく誰も戻ってこないと思うけど」

「あ、いや。俺はもう、買い物は」

「飽きちゃった？」

「え？　あ、て言うか。う……」

親しい調子で小首を傾げられ、思わず曖昧に返事をする。美貌のガイドはそんな啓太に「うふっ」と笑い、いきなりつかつかと近づいた。

「え？　な、なんですか？」

啓太と真帆が座っているのは、バスの中央あたりにある座席であった。



誰もいないのをいいことに、パンプスの音を響かせて接近するや、佳織はおもむろに腰を折り、啓太に美貌を近づける。

「——え!? え、え、わわっ?」

啓太は動揺し、身体を硬直させて息を飲んだ。すると佳織は、

「見・ちゃっ・た・わよ。ふふっ」

甘く秘めやかな囁き声を、熱い吐息とともに啓太の耳朶に吹きかける。

「え!? あ、あの……見ちゃったって、なにを?」

「もー、啓太くんってば、しらばつくれちゃって」

何のことだかさっぱり分からないまま問いかければ、佳織は意味深に口の端を吊り上げ、啓太の肩を小突きながら、通路を挟んだ隣のシートに腰を下ろした。

いきなり「啓太くん」などと下の名前で呼ばれるわ、なおもジト目でニヤニヤとほくそ笑んで見つめられるわで、啓太はムズムズと妙な心地になる。

「しらばつくれって、言われても……」

「んもう、いくら若い恋人同士だからって、アツアツすぎるにもほどがあるわよ? 仏さまの前で熱うっい抱擁なんか交わしちゃって」

揶揄する口調で突っ込まれ、啓太は「あ」と絶句した。

(も、も……もしかして!?)

「本堂に残っている人はいないかしらつて確認をしに戻ったの。あくまでも業務上必要な、ごくごく当然の行為よね？ そしたらも〜〜〜」

「ま、待って！」

やはり馬頭観音の前での思わぬアクシデントのことを言っているらしい。意外な人物に真帆との一部始終を見られていたと知り、啓太は一気に頬を熱くする。

「いつからつきあっているの、真帆ちゃんとは？ ん？ んん？」

「いや、つきあってなんかいないって！」

興味津々の表情で聞かれ、慌てて返事をした。

「え！ つきあってもいないのに、あんなに熱烈に抱きしめあっていたの!？」

これ見よがしに口を覆い、目まで剥いてみせながら佳織は仰け反つて啓太を見る。

もしかしたら、からかわれているだけなのかも知れなかった。しかし啓太は、ついムキになって説明をする。

「だから違うんですってば！ あれは、真帆先輩が足元をもつれさせて、倒れそうになったから、急いで助けてあげただけで……」

「いやいやいやいや」

「何ですか、『いやいやいや』って!」

目を大きくしたままかぶりを振られ、啓太は思わず語調を強めた。

「だって、顔を真っ赤にしてそんなこと言われてもな。じゃあ単なるハプニングだったって言いたいわけ?」

「い、言いたいんじゃないくて、事実そうなんです!」

「えー。真帆ちゃんのこと何とも思っていないの? あんな綺麗で可愛い子なのに?」

「う……」

やはりこの人は、自分をからかって楽しんでるだけかも知れないと思った。

言葉に詰まっていますます顔、熱くする彼を、悪戯っぽい上目遣いで見つめ、佳織は笑いを噛み殺す。

「ねえどうなの? どうなの、どうなの? ほんとに何とも思っていないの?」

「お、思っていないですよ! 単なる……: 仏像サークルの先輩後輩というだけで……」

「あのね、啓太くん、ますます顔、真っ赤なんですけど」

「真っ赤じゃないです!」

「ふふ、可愛い」

それは、あまりに突然の出来事だった。

いきなり佳織はシートから身体をずらしたかと思うと、

……ちゅ。

(……え！ え、え……ええ!!)

「ふふ、奪っちゃった。啓太くんの唇。ん……」

温かくて柔らかかでヌメヌメしたものが、またも啓太の唇に密着した。それが佳織の唇だと分かるまで、情けないことにしばらくかかった。

「ちよっ……か、佳織さん!! なにを——」

啓太は背筋を仰げ反らせ、不意打ちのような朱唇から逃げる。

もしかして今俺は、キスなるものを経験したのか。

いくらメチャメチャ可愛いとは言え、今日会ったばかりの素性も知らないバスガイドさんに、ファーストキスを捧げてしまったのか!?

「なにして、可愛いからチュウしただけ。もう啓太くんってば食べちゃおうかな」

「た、た、た、食べちゃおうかなって。あ……」

啓太はますます泡を食い、窓際に後退した。すると佳織は、啓太が座っていた場所にするりと滑り込み、ねっとり潤んだ瞳で彼を見る。

「だって、真帆ちゃんと恋人でもなければつきあいたいとも思っていないでしょ。見

たところ、他にカノジョがいるとも思えないし」

「わ、悪かったですわね！」

「ふふ、だから……私がこんなこととしても、誰か他の女の子に迷惑かけるわけじゃない……でしょ？」

「あ……んむう」

三度目の接吻は、それまでとは比較にならない濃厚さであった。隣に座って身を乗りだしたバスガイドは、有無を言わせぬ強引さで啓太の唇を強奪する。

啓太は体重を預けられ、窓に頭を押しつけながらだった。白い手袋に包まれた細い指が啓太の頬を包み込み、彼の動きを封じている。

「うふふ、こんなに緊張して。やつぱり、これが初めてのチュウなのね。ん……」  
「んむ、んむう。ちよつと、佳織、さん。んん……」

ちゆつ。ちゆば、ちゆう……。

なんと大胆なバスガイドであろう。

いつ誰が戻ってくるかも分からないこんなスリリングな状況で、こんな風に男の口を、熱烈かつ強引に奪って吸って、ぐいぐい朱唇を押しつけてくるなんて。

（あ、ああ、何これ。き、気持ちいい……頭の芯がじーんとして……）

戸惑う気持ちはありながらも、人生初体験のキスの心地に、いつしか啓太はしどけなく、力が抜けてぼうっとしてくる。

柔らかで温かく、卑猥なぬめりをたっぷりとたたえた肉厚の唇。

啓太の顔を両手で優しく包んだまま、右へ左へと熱っぽい調子で顔を振り、佳織は口を押しつける。

（甘い息……ガムでも噛んでみたい。女の人の息って、こんなにいい匂いなんだ）  
接吻を続ければ続けた分、色っぽい唇からは熱い吐息が零れだしてくる。

そっと目を開けて見つめれば、可憐なガイドはうっとり目を閉じ、長い睫毛を震わせて、キスの悦びに耽溺している……かに見える。

「びっくりした？ ふふ、ほら、舌だして」

「か、佳織さん」

「いいから。ベロチューしよ。ほら」

「ああ……」

言いながら、佳織から舌を差し出した。

キュートな美貌が色っぽく崩れ、ローズピンクの舌が飛びだしてくる。

なおも惑いはありつつも、啓太はもう抗えない。おずおずと舌をだして応じると、

ピチャ……。

（うおお、何だ、これは!!）

舌と舌とがクネクネと互にくねりつつ、相手に擦れた。

その途端、甘酸っぱさいっぱい疼き、股のつけ根から脳へと突き抜ける。生まれて初めて体験する魅惑の激感。啓太はうろたえ、ついつい行為にのめり込む。

「むはぁ。可愛いわ、啓太くん。むふう、むふう。あん、感じちゃう」

「んおお。佳織、さん。ピチャ」

佳織の零す温かな鼻息が、啓太の顔を舐めるように広がった。

キュートなバスガイドはいつそう興奮した顔つきで身を乗りだし、啓太の顔を両手に包んだまま、なおも熱烈に舌を絡みつける。

そのたび車内に響くのは、猫がミルクを舐めるような秘密めいた粘着音。

いけないことをしているのだという後ろめたい現実を改めて実感させられ、啓太はよけいに股間を疼かせた。

（すごく気持ちいい。これが、ペロチュー。おおお）

正直に告白するならば、ふとしたはずみで偶然目にしたネット動画などで、男と女がこんな風に下品なキスを交わしている姿は何度か目撃している。

濃厚でありながらどこか滑稽なものも感じさせた、熱っぽい接吻上級編。しかし実際に体験してみると、その快さは想像を絶する官能味に富んでいる。

ヌメヌメとザラザラが一緒くたになった舌を擦りつけられるたび、悪寒のような鳥肌が背筋を駆け上がった。

股間の疼きは尻上がりに切迫したものと変わり、いつしか啓太の分身は亀頭の形にジーンズを盛り上げ、早くだしてくれと訴えを始める。

「ふふ、ぼうつとした顔しちゃって。変な気分になってきちゃった？」

そんな啓太の心と身体のエッチな変化は、全部お見通しという感じで佳織が笑んだ。潤んだ瞳を色っぽく細めるや、妖艶に口角を吊り上げる。離れた舌と舌の間にねつとりとした唾液の橋が架かり、自重に負けてU字に撓む。

「あの子!? 佳織さん、俺」

「恥ずかしがらなくてもいいの。心臓、ドキドキしてきたでしょ。でもって……」  
「うわあ」

誘うような視線で、なおも啓太を見つめながらであった。白い手袋に包まれた指が啓太の股に伸び、ズボンの膨らみを撫で擦る。

身も蓋もなく勃ってしまった陰茎をジーンズ越しにまさぐられ、啓太は羞恥と気持



ちよさの双方にかられた。

「か、佳織さん。ああ……」

「いいのよ。勃起するのが当然でしょ？」

「勃起って。うう」

あけすけな佳織の物言いに、啓太はますます息苦しくなってくる。

「だって私、啓太くんのちんちん、こんな風に勃起させたくて、してるんだもん」

「え。え、え……ああ？」

思いもよらない佳織の責めに、たしかに頭が白濁し、ムズムズと淫らな気持ちになつてきてはいた。

しかしズボンのボタンをはずし、股間のファスナーを下ろし始めた佳織を目にする  
と、やはりさすがに戸惑いの気持ちが増す。

「何するの。やめて。誰か、戻って来たら……」

「その時はその時よ」

「ええ!! ああ、ちよつと……」

「いやなの？ おちんちん、舐められたくない？」

「え」

舌つたらずなその言葉は、麻薬のような強さで啓太の理性を呪縛した。

(チ、チンポ……舐めてもらえる!?)

そう思うと不埒な激情がさらに増し、肉棒が一段とはしたなく疼きだす。

つい先ほどまで感じていた佳織のぬめり舌は、男を腑抜けにする魔性の感触で、大いに啓太を浮き足立たせた。

あの気持ちのいいヌルヌルで怒張を舐められたらどんな快感を味わえるだろう。女の人のフェラチオとは、どれほど卑猥なものなのだろう。

情けないことに、ピンクの妄想で脳髓が泡を噴いた。

そうした啓太のうろんな様を、佳織は見逃してくれなかった。ジーンズのパースナールを完全に下ろすと、ブリーフもろとも一気にずり下ろす。

5

——ブルルルルンッ!

「まあ、すごい」

「はうう、は、恥ずかしいよ」

とうとう啓太は一物を、エッチなバスガイドに丸ごと晒した。

強引に露出させられた陰茎は雄々しく反り返り、ぷっくりと膨らんだ赤銅亀頭を天に向かつて突きだしている。

破廉恥極まりないその眺めは、握った拳を突き上げた男の前腕そのものだ。

「は、恥ずかしがることなんてないじゃない。なにこれ、すっごく……大きい」

どうやら世辞ではなく、本当に仰天したらしい。整った美貌を色っぽく紅潮させた佳織は、肉厚朱唇を半開きにしたまま、憑かれたように勃起を凝視する。

佳織が目の当たりにしているのは、二十センチは軽々と超えた、長くて太い文字通りの巨根。

気が小さいだけで、あとはこれと言った個性も持たない啓太であったが、股間に下げる一物だけは、世の男性たちの平均サイズを軽々と凌駕していた。

しかもただ大きいだけでなく、その肉根はゴツゴツと太い血管を浮かべ、先っぽに張りだすカリ首など、イカのヒレかと思うほど凶悪に傘を突きだしていた。

顔つきや体型がどちらかと言えば中性的で大人しそうな分、いきり勃った極太のまがましい迫力は、いつそう鮮烈に見えるかも知れない。

しかし、だからこそ啓太は本気で恥じらい、己の分身にちよつとしたコンプレック

スさえ抱いていた。

「佳織さん。そんなに見ないで」

「どうして、どうして？ ごめんね、ちょっと真剣に驚いた。啓太くん、こんなおっきいちんちんぶら下げてたんだ」

「ぶら下げてたって……うわああ」

不躰極まりない熱視線にたじろぎ、慌ててペニスを隠そうとした。だがそんな啓太の抵抗より一瞬早く、佳織は屹立に手を伸ばし、手袋でそっと包み込む。

「うおおお、佳織、さん」

乾いた感触の手袋の下に、温かで柔らかな女性の指を啓太は感じた。自分以外の誰かにこんな風に触れられたのは、もちろん初めてのことである。

「わあ、それに、硬くて……あ、熱い！ あん、たまらないわ」

「うおおお……」

歓喜の吐息を熱風のように吐きだすや、猛る怒張をしこしこと扱きだした。

白い手袋をした指がリズムミカルな動きで上下に躍る。青筋浮かべた極太をねちっこい反復運動で擦られて、啓太は思わず不様に呻いた。

ザラザラした感触の、手袋の刺激が心地いい。

小顔の上では帆を張った小舟のような可愛い帽子が、動きに合わせてカサカサと揺れている。

「すぐかったのね、啓太くんって。ごめんね、ちょっと見くびってた。ああん……」  
扱かれる啓太も甘酸っぱい興奮が募ったけれど、扱く佳織も同様に、不埒な熱情がますます加わり、色白の頬には紅を刷はいたような火照りが増した。

「あうう、佳織さん」

「どうしよう。こんなすごい……んっんっ、ちんちん、見ちゃったら……」

朱唇から零れる乱れた吐息が、ますます切迫して熱いものになった。

佳織は窓の外に視線を投げ、まだ大丈夫と判断したのだったか。

なおもしこしこと扱いて緊張気味のペニスを白い指に馴染ませたかと思うと、いきなり身を屈め、ひくつく亀頭に顔を近づけて、

ピチャ……。

「うわあ」

「やん、ピクピクいつてる。れぢゅ……」

（うおおお！ き、気持ちいい！）

舌を突きだした佳織は、猛る亀頭に蛇のようにまとわりつかせ、飴でも舐めるよう

にねちっこい愛撫を始めた。

ヌメヌメした温かな舌で鋭敏なスポットをしつこく抉られ、火を噴くような快感がペニスの先から何度も閃く。

危険すぎる行為であることは百も承知だった。

現に今でも啓太の視線は、何度もちらちらと窓外に向けられる。

それなのに、やめてくれとは言えなかった。

いや、やめてほしいと思う気持ちだつて、たしかにありはするものの、

(何これ。こんなにいいのは、初めて)

人生初体験のフェラチオの快さが、啓太をいけない情欲の虜にする。

もっと舐めてほしい、もっともつとという、ふしだらかつ自堕落な願望が、完全に理性を上回っていた。

真帆が大好きでたまらないという、その恋心に嘘はないのに。今はただ、この可愛い女の人に、疼く怒張をバター犬のように舐めてほしいかった。

「アン、おつきいわ。こんなに逞しいちんちん、初めてかも。んぢゅぶ」

「わあ……」

啓太の股間に首を伸ばしたバスガイドは舌のくねりに一段と妖しげな粘りを加え、

右から、左から、裏筋から、さらにはぐるぐると円を描くような激しきで、涎まみれの鈴口を、ねっとり、たつぷり舐めしやぶる。

しかも、舌を絡みつけるだけでは飽きたらなくなり、とうとうパクリと口いっぱい、啓太の猛りを頬張った。

（うおおおおお！）

「むふう、むふう。ああ、どうしよう。興奮しちゃう。んん」

ぢゅぼぢゅぼ、ぴちや……！！

「ぐああ……」

下品な啄木鳥と化した佳織は、しゃくる動きで顔を振る。

小さく窄まった肉厚朱唇とヌメヌメした口の中の粘膜が、鳥肌立つほど窮屈な締めつけで怒張を絞り、上へ下へと往復した。

たつぷりの唾液をまとった、ほどよいぬくみのぬめり肉がカリ首に擦れ、腰の抜けそうなエクスタシーが瞬く。

はつきり言ってそれだけで、信じられないほどの恍惚天国。

こそこそ処理をするオナニーなどとは比較にもならない天にも昇る快さに、啓太は全身を強ばらせ、狭いシートで背筋を反らして不様な呻き声を上げた。

なのに佳織はまだまだ許さない。ひくつく棹を執拗に扱き、再び舌まで繰りだして、喘ぐ亀頭を舐めしやぶる。

まるで三分以内に亀頭全部を舐め溶かさないと、人生の重大事に支障を来すとも言うような熱烈さだ。

「うわああ、だ、だめ。これ気持ちよすぎる。でちゃうよ、佳織さん。でるう」

いまだ女を知らない童貞青年には、あまりに刺激が強すぎた。

慌てて尻を窄めても、点火した吐精衝動は夏雲さながらに肥大していく。

その上、肉に飢えた獣のワイルドさで、ペニスをしやぶる佳織の顔つきはどうだ。

愛らしい美貌が不様に崩れ、顔の皮が引つ張られてひよっとこのようになっていた。クレーターかと思うほど左右の頬が深く窪み、鼻の下の皮が餅のように伸びきって、形のいい鼻腔が正視に耐えないほど伸張している。

そうしたガイドのフェラチオ顔に、よけいに啓太はそそられた。

これほど可愛い人が自分なんかのためにこんなにも滑稽な顔になって奉仕をしてくれるなんて。なんだか万能の力を手に入れたような錯覚さえ覚えてしまう。

「どうしよう、でちゃうよ、でちゃうよお」

「いいわよ、好きただけだして。私が口で……受け止めてあげる。むんう」



いよいよ佳織はピストンを、怒濤の勢いで加速させた。

桜色の丸帽子が、今にも吹っ飛んでしまおうかと思うほどだ。

しかも気づけばこの人は、手袋を嵌めた白指で、啓太のキンタマをやわやわやわと絶妙の加減で揉みしだいている。

(たまらない。もうだめだ)

快感のうねりがしぶきを散らし、啓太の脳髓を麻痺させる。

生来の臆病さでビクビクと外を見ていたものの、いつしか瞳はドロリと濁り、視界がぼやけてなんだかさべてがもはやどうでもよくなってくる。

ふぐりをソフトに揉まれてるせいで肉棒が引っ張られ、龟头がいつそう鋭敏になっ  
っていた。

そんな状態でねろねろとカ리를舐めしゃぶられては、もう限界もいいところ。

このままたつまでも、心地いい粘膜に丸呑みされていたのに、獣としての本能が啓太にそれを許さない。

陰囊の門扉を突き破り、ザーメンの奔流がせり上がりだした。啓太は「ああ。あああ」と女のような声を上げ、佳織の頭に両手をあてがう。

「だして、啓太くん。ぢゅぽ。いっばいだして。ぢゅぽぢゅぽ……」

「うわあ、もうだめだ。ああああ！」

どぴゅっ！ どぴゅどぴゅどぴゅ！

ピンクの雄々しい電撃が、雷いかずちさながらに貫いた。

夏の夜空に火の花を噴かせる、火薬満タンの尺玉にでもなった気分。ドカン、ドカンと脳内で、桃色火花が炸裂する音まで、たしかに啓太ははつきりと聞いた。

意識が白濁し、数秒、音まで完全に途切れた。じわじわ意識を取り戻してみれば、なおもペニスは変わらずに、雄々しい脈動を繰り返している。

ドクン、ドクン……。

(気持ちいい。小さい穴に……チンポの先が食い込んで締めつけられてる)

絶頂感こそ峠を越えたものの、怒張に感じる目の眩むような快さは、今なお啓太を腑抜けにしていた。

それにしても、どうしてこんなに極太の先に窮屈さを覚えるのであろう。人の口とは、これほど狭苦しいものだったか？

「ごが。んごご。ぐるう……」

「……あ！ か、佳織さん!!」

くぐもった呻き声を聞いて、ようやく啓太はハツとなる。

なおも佳織は屹立を、口中深く頬張ったままだった。しかも彼女にそんな風にさせていたのは、他ならぬ自分自身のものである。

フェラチオ射精の気持ちよさに耽溺するあまり、佳織の頭を掴んでいた手に力が入り、ぐいぐいと股間に押しつけてしまっていた。

そのせいで、目鼻立ちのはっきりした色白美貌が啓太の股に密着し、彼のペニスは根元まで佳織の口に埋まっている。

亀頭を締めつける不可思議な狭さは、彼女の喉穴まで飛び込んでいたからだど、ようやく啓太は気づいた。

「お、おげ。ぐ、ぐるじ、い……ぐげ」

「ご、ごめんなさい！」

慌てて放した啓太の両手は、精悍なポリスに銃を突きつけられた犯人さながらの格好になる。ようやく解放されたとばかりに、佳織は慌てて身を起こし、

「ごはっ……」

閉じたくても閉じられない口の中から、とろけた糊のような白濁を飛び散らせた。佳織は急いで天を仰ぎ、「むんう、むんう」と生々しい呻き声を零す。

「許して、佳織さん。俺、いっぱいだしちゃったから——」

今さらどうすることもできずに、啓太はおろおろと謝った。すると佳織は、そんな啓太に「待つて」というように片手を上げ、

「ご、ごくつ。ぐるる。ごくつ……」

（え!! あ、ああ……飲んでくれてる!）

天井に顔を向けたまま、白い首筋に微かな隆起を浮かべて精子を嚙下する。

口の中に射精させてもらえただけでも夢のような出来事なのに、飲精までしてもらえるなんて、ほんとにこれは我が身に起きた現実なのか。

「ふふつ。ごくつ。ほんとにいつぱいでしたわね。気持ちよかった?」

唇についた精子の名残を、手袋をとった白い指で掬いながら舐め取り、なおも色っぽい笑みでねぶるように見て佳織は言う。

「う……うん。よかった」

目の奥を覗き込まれるような顔つきで微笑まれ、頬が熱くなるのを感じながら、啓太は小声で答えを返した。

すると佳織は再び手袋を嵌め、そんな啓太の頬を「ソフフ」と笑ってつついては、

「可愛いのね、啓太くん。この可愛さと反則クラスのちんちんのギャップが魅力的だったりして」

艶っぽい囁き声で言うと、いきなり席から立ち上がる。そして——!!

6

「——うわ。か、かか、佳織さん!？」

なんと大胆な人だろうと、啓太は目を剥いた。スカートの裾を掴んだかと思うや、佳織はそれを捲りあげ、いきなり下半身を露わにしたのである。

(わ、わわわ! すごい太腿……それに、ああ、このエロパンツ! おおお……?)  
湯気のように香り立つて啓太の顔を撫でたのは、スカートの中に籠もっていた甘酸っぱさいっぱいのお臭。

温室の扉を開け、高湿度の空気に顔を舐められた時に感じるような、重たくも淫靡な湿気の魔力に、またも啓太は息詰まるほどの劣情を覚える。

その上車内にさらけだされたのは、むちむちしすぎるにもほどがある肉感的な早熟太腿と脹ら脛の肉彫刻。みずみずしい女の脂をたっぷりと詰め込んだ、健康そのものの白い腿がプルプルと震えている。

黒いパンプスに脚の先を包んでいるせいで脹ら脛の筋肉がくぼつと盛り上がり、子

を孕んだししゃものような艶麗ラインを見せつけていた。

こもりと盛り上がる股間の局部に食い込むのは、極端に小さな紫色のセクシーパ  
ンティ。

ワレメの部分に三角の布が食い込んでいるだけで、腰回りなどまさに紐以外の何も  
のでもない。

そんな細紐の右と左に、ワンポイントのようにレースの飾りがついている様も、な  
んだか妙にエロチックだ。

しかも目玉を剥いてよく見れば、紫色の三角クロッチはシースルータイプらしく、  
ワレメらしきものがチラチラと見えている。

(うわ、うわ、うわああ)

「あ、あの、佳織さん。なにするつもり?!」

心の中では馬鹿丸だしで叫んでいたが、とにもかくにも取り繕う。唇を舐めて妖し  
く微笑むバスガイドに、声を震わせて啓太は聞いた。

「決まってるじゃない。自分一人だけ気持ちよくなって終わるつもり?」

すると佳織は、何を今さらというような苦笑とともに、舌つたらずな返事をする。  
乗馬でもするようなポーズでまたがるや、対面座位の格好になった。

「え。あの。あのあの、まさか」

これはもはや、どう考えてもアレをするつもりだとしか考えようのない、夢のような——いやいや、非常識もいいところの、危険極まりない挿入態勢。

口中に精を搾り取っただけでは飽きたらず、よもや佳織はこの場所で、  
(セックスしちゃうの俺と!? あああ)

啓太はもう、蛇に睨まれた蛙も同然だ。

しかも微笑むこの蛇は、抗う力など瞬時に無にする愛くるしさと色っぽさを振りまき、お色気ムンムンのエッチな肉体を持ってあまして、やりたいオーラを蒸気のように浴びせかける。

「なにがまさかよ。したくないの？ ほら、ほらあ……」

鼻の頭のくつつきそうな距離で向かいあつた佳織は、腿のつけ根に指を潜らせ、秘丘に張りつく前布をクイツと真横にずらした。

(うおおおおお！)

パンティの下から飛び出した眼福ものの絶景に、啓太は叫んでしまいそうになる。剥きだしになったヴィーナスの丘には、一本の陰毛も生えていなかった。

生まれつきなのか処理しているのかは定かでないが、赤んぼうのほったのよう

つるつるとした、完全無欠のパイパンマ○コである。

ワレメもロリロリとあどけない感じで、やはり幼子を思わせる可憐な初々しさ。ふつくらとして色素沈着も薄い柔らかそうな肉土手に、縦一条の亀裂が走っている。

蝶の羽のように開くビラビラも、いたって小振りで恥ずかしげな佇まい。中から覗いた牝粘膜は、佳織の制服カラーに似た、淡く儂げな桜色であった。

(み、見ちゃった。生まれて初めて、女の人の生マ○コを！)

気づけば啓太は食い入るようにガン見して、美貌のガイドが惜しげもなく見せつける華唇の眺めに恍惚となる。

お腹の底に裂け開いた牝肉は、どうやらすでに相当の発情状態。

ぬめる恥裂の一番下にある窪みから、にぢゅぢゅ、ぶぢゅぢゅと下品な音を響かせて卵白のような女陰涎をだらしなく溢れさせる。

(これって愛液だよな。すぐく甘酸っぱい匂い。なんだか頭、とろんってなる……)

目にするパツクリもエロならば、鼻腔に染み入る女の香りもR・18な濃縮エロアロマ。鼻から脳へと染み広がって視覚や嗅覚を狂わせるばかりか、脳内回路の路地奥まで容赦なく煙らせては、殺傷能力の高いどピンク猛毒で理性や道徳を麻痺させる。

「ああ、もう我慢できない。啓太くん、天国に連れてってあげるわね」



そう言うや、膝立ちの佳織は位置を整え、啓太のペニスを手に取った。

情欲怒張はついさつき射精したことなど覚えていないという白々しきで、天に向かつて亀拳を突き上げ、スケベな力瘤を浮かべて淫らな熱情を漲らせきっている。

佳織はそんな肉棒を幸せそうにワレメに押しつけると、おもむろに腰を落とした。

——ぬぶっ。ぬぶぬぶぬぶぬぶっ！

「ああああああ」

「わわわ、か、佳織さ……わあ、わあああ」

（うわ、やば！ マジで、何これ。わわわわ？）

ヌメヌメと温かな肉の筒が、亀頭の前から出っ張った部分へ、さらにその先のゴツゴツした棹へと、粘りながら下降していく。

もしかしてこの人は、挿入させる自分の穴を間違えたのではないかと思うような驚くべき窮屈さ。三百六十度全方向から、密着感いっぱいぬめり肉が、波打つ動きで怒張を搾る。

「うあああ。入ってくる。やん、やつぱりすごい。すごいすごい。ああああ」

佳織はなおも腰を沈めて、腹の底深く極悪勃起を飲み込んでいく。

そうした美人ガイドの様子を見る限り、どうやら穴を間違えたのではないらしい。

となるとこれが女の人の、いわゆる「オマ○コ」。

男に生まれて大きくなれば、誰でも後ろめたい憧憬を抱かずにはいられなくなる、女の人の身体のもつとも遠くに存在する魅惑の妖蜜楽園。

これがそうなのか。これがオマ○コの触感なのか。俺は今この瞬間、十八年間守り続けた童貞を喪ったというのか。

女性が股の底に隠し持つ淫らな裂け目の生々しい刺激に、啓太は思わず、

（うお、うおおおお！ 気持ちいい！ これだめすぐでる精子でる！）

ぬぷっ、ぬぷぷつと分身を飲み込んでいく牝洞は、童貞青年の妄想などとは比べものにもならない、慄然とする快さ。

その狭さに驚いたと同時に、ため息の漏れそうなぬくみとぬめりと凸凹感にも恍惚とする。

しかも卑猥な洞窟は、奥へ進めば進むほどいつそう細く狭まって、ムギユムギユと亀頭を揉み潰してくる。

佳織の口も最高だったけれど、五感に覚える心地よさは、口腔粘膜の十倍はあった。啓太はむううと唇を噛み、イッてしまいそうな衝動に懸命に堪える。

「あ、ああ、届いてるわ、啓太くん……」

「うおおお……え？」

どうやらずっぱり根元まで、猛りのすべてを咥え込んだらしかった。

啓太にぴたりと股間を密着させたバスガイドは、妖しく瞳を蕩けさせ、青年の首に腕を回す。

「奥まで……届いてる。アアン、大きい亀頭が……、亀頭がああ」

「わわっ!!」

不様な悲鳴を上げ、背もたれに背中を叩きつけた。シートに膝を突き、啓太の腿を挟みこむ年上美女は、自らいやらしく腰を振り、ぬめりを亀頭に擦りつける。

ぐぢゅる、ぬぢゅ……。

「わ、わあ。ああ、これだめ、気持ちいい……」

ペニスから湧き上がる快感は、挿入した時より一桁も二桁も確実に増している。

佳織がカクカクと腰を振り、股間に股間を擦りつけるたび、ピンクの火花が頭蓋に噴き散り、型崩れをする豆腐のようにドロツと脳味噌が蕩けだす。

「うああ。私もイイわ、啓太くん。これがセックスよ。男と女は……あああ、こうやって、愛を確かめあつて……ひいいん、子どもを作っているの。あああ」

「あ、愛を……確かめあう……子ども……ううう」

正直に言うなら、佳織は愛を交わしていい相手などではなく、いわんやこの人との間に子孫を残そうとする希望など、どこを探したって啓太の中にあるはずもない。

つまり佳織の言う通りであるならば、やはりこれはしてはならない、いけなすぎる行為。なのにあまりの気持ちよさで、啓太は「やめて」と抗えない。

「か、佳織さん。蕩けちゃう」

「このまま続ける？ 私とつきあつて、二人の子ども、作っちゃう？」

「うう、それは……」

可憐な柳眉を八の字に撓め、熱っぽい顔つきで聞いてくる佳織に、啓太は思わずうろたえた。すると佳織は、「ソッフ」と口角を吊り上げ、

「冗談よ。そんなに堅く考えないの。気持ちよければ……アアン、幸せなひとときを一緒に過ごせるなら、あ、あ……女は充分しあわ……あああああ」

下品な痴情を沸き立たせ、いつそう強い快感を貪ろうとする佳織。啓太の首に腕を回したまま片方ずつ脚を動かし、なんとがに股になつて青年と繋がる。

もちろん黒いパンプスは、しっかりと履いたままである。

いやらしすぎるその格好は、和式便器にまたがって用を足すかのよう。ミッシリと脂肪の詰まった白い内腿を大胆に晒し、二つの爪先が百八十度近く外に向く。



むっちり腿や脹ら脛が透き通るように白い分、パンプスとのギャップが鮮烈だ。  
バツン、バツンバツン！

「うお、うおお、佳織さ……」

「ああ、イイわ。イイ、イイ！ うあああああ」

排泄ポーズ以外の何ものでもない体勢になった佳織は、自ら激しく腰をしゃくり、身も蓋もないケダモノぶりで性器の擦り合いをエスカレートさせた。

つるつるとした清らかさを感じさせる秘丘の下で、小さな肉穴がきつそうに怒張を食い締め、ミチミチと広がっている。啓太のペニスは融けたバターのような佳織の愛蜜で、もうドロドロもいところだ。

どす黒い棹のここに、白い濁りが付着していた。

ひくつく媚肉は波打つ蠕動を繰り返しては、亀頭の手先から根元まで、いきり勃つ極太を絞り込む。

（き、気持ちいい！）

膣の凸凹とカリ首が擦れるたび、腰の抜けそうな電撃が閃いた。亀頭の手先から、精液の残滓を入り混じらせた濃密カウパーがドロツと漏れる。

知らなかった。セックスとは——女性の性器に猛るペニスを擦りつけるとは、これ

ほどまでに心地よく、男を腑抜けにさせる行為だったのだ。

世の中に数多ある男と女のラブラブカップルは、日ごと夜ごと、こんないやらしくて気持ちのいいことをこそそそとやり、精液だの愛液だの潮だのを思う存分噴き散らして、内緒のエクスタシーを味わっていたのであったか。

(潮……佳織さんも、潮とか、噴く……?)

「はうう。やん、啓太くん。もうだめ。イッチャウかも……ううん、イッチャウ！」

「あ……? 佳織さん。うおお……?’

どうやらついに、最後の瞬間が迫ってきたらしい。

青年の首から手を放した佳織は背もたれの縁に指をかけ、反動をつけて腰をしゃくりだした。

「うわあ、佳織さん。腰の振り方……エロすぎる！」

前へ後ろへとエロチックにくねる豊かな腰回りの眺めに、啓太は首を絞められたような息苦しさを覚える。

「あん、啓太くん。イ、イイイッ！」

野卑な中年男が温泉の宴会場で、下品に繰りだす腹踊りさながらの卑しさ溢れる振りたくり方。白い股間が前にしゃくられ、膣奥深く怒張を飲むたび、腹のところから

インが生まれ、肉が盛り上がって三段腹にもなる。

すごいがに股だった。すごいしゃくり方だった。

鼠径部の腱がくぼつと浮き、深く濃い影が腿のつけ根に生まれている。

啓太の太いスリコギが、獷猛なピストンで蜜の穴を出入りした。

獣と獣が交わしあう、もつとも原始的かつ究極の愛情表現の光景は、ただただひたすら生々しい。

「おお。おお。おお。」

その上漏れだす佳織の艶声は、ツアー客たちに聞かせていたチャームिंगな解説の声とは、まるで別人だった。

ズシリと低く響いて跳ね、淫牝の素顔をいやというほど見せつける。

気持ちよくなると、女の人は本当にこんな声をだしてよがり吠えをする生き物だったのだ。

となるともしかして、真帆先輩もそうなのだろうか。あのキュートな女子大生も、セックスをして我を忘れると、やはり佳織さんみたいに別人になるのか。

「ああ、か、佳織さん。気持ちよすぎて我慢できない。もう精子でるよ……」

息もつかせずペニスを抜く極上恥壺の抜き差し責めに、もはや啓太は我慢の限界だ。



背筋を撓ませ、間抜けに顎を突き上げて、佳織に合わせて腰を振っては、蕩けるほどの快感に身体も心も白濁していく。

パンパン！ パンパンパン！

「おおおう。啓太くん。私もイイの！ ひいいい」

もはや佳織は、檻からだせと暴れまくる、世にも可愛い牝ゴリラのような腰振りトランス状態。踏んばったパンプスの踵がシートに食い込み、ギシギシと席が不穩に軋む。

またも精子が、陰茎の芯を奔流のように駆け上がりだした。

白い光が目の裏で瞬き、耳の奥からキーンという音が高まってくる。

(で、でる！)

「イクよ、佳織さん。イクイクイク。あああ……」

「ひいいいん。おおおおお！」

どびゅどびゅっ！ どびゅどびゅどびゅ！

頭の中でナパーム弾が音もなく閃き、啓太の身体を焼け野に変えた。青年はさながら、陸揚げされた魚のように。ビクンビクンと痙攣し、再びペニスを爆発させる。

「あ、あああ……おおおおおん!!」

歡喜と狼狽がMIXされたような艶めかしい声だった。長く尾を引く獣の聲に導かれるかのように、射精をしながら啓太は目を落とす。

——ブシュッ！ ブシュブシュ、ブシュシュ！

（おおお！ これは……もしかして潮!? ああ俺、佳織さんに潮まで噴かせて……）  
心の赴くままに精子を注ぎ入れながら、間歇泉のように噴き上がる佳織の潮しぶきに、啓太はうっとりとなつた。佳織が放った潮吹き汁は二人の顔にまで到達し、火照つた頬にビチャビチャと当たると。

「佳織、さん……」

「うう、すご、かつた。気持ち、よすぎなの。あああ……」

不随意に女体を痙攣させながら、汗ばむ身体でバスガイドは、しっかと啓太にしがみついた。

そんな佳織を優しく抱き返し、なおも啓太は幸せな心地で、ドクドクと陰茎を脈打たせた。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**